ＩＰＰＮＷ世界大会の報告

（月刊保団連3月号投稿）

去る12月４日から7日までオーストラリアのメルボルン大学で第13回IPPNW（核戦争防止国際医師会議）世界大会が開催され、40カ国より約350名が集まった。保団連からは河野副会長と私、そして事務局の稲葉氏が参加。核戦争に反対し核兵器廃絶を求める医師・医学者の集い（以下”集い”）としては通訳も含め総勢18名の参加となった。近年、核兵器をめぐって世界的な動きがめまぐるしく、国際政治の舞台や各国の反核運動の最新の状況を知る貴重な機会となった。

暴力の世紀と今後

開会にあたりマッコイ共同議長が「暴力の世紀と今後」と題して講演。その中で、２０世紀について「かつてない医学の進歩があり生命を救うことができるようになった」が、同時に「死を生む対立や紛争の、暴力の世紀でもあった」と指摘。また、人権の重要さ、生命への権利が認識され、人道主義的な施策が生れたが、人権が侵害され、その最たるものが核兵器で、兵士も民間人も区別なく命を落とすようになったとのべた。

さらに、核兵器について「存在する限り、偶発戦争や、テロリストによる核攻撃の危険がある。ＮＰＴが調印されたが、核保有国は義務を実行していない。ICJによって勧告的意見がだされ、キャンベラ委員会によって核廃絶のプログラムが示され、各国のリーダー達が廃絶を訴えているが核はなくなっていない。ＣＴＢＴの精神も踏みにじられている。臨界前実験がおこなわれ核兵器の近代化、新しい開発がコンピュータシミュレーションを使っておこなわれている」と指摘した上で、インド、パキスタンの核実験について「非難されるべきだが、核廃絶か核をみんなに渡すかの２つの選択肢しかない」と語った。

メイン会場にて

ＩＰＰＮＷを含むＮＧＯが、今年の３月に中堅国イニシアティブ（ＭＰＩ）を始めた。その３ヶ月後に８中堅国政府が新アジェンダに向けてという核廃絶のための宣言を提案、国連で採択された。投票では「１２のＮＡＴＯ諸国が核保有国の圧力に抗して棄権に回った」とＮＡＴＯの核抑止力政策が転換点を迎えたことを明確にした。最後に、２０世紀の政府が、暴力による対立をなくせなかったことについて「武力が使われてはいけない。紛争を起こす根源を探り、その根源を解決しなければいけない」と国際社会が予防策をとらなければならないことを訴えた。

中堅国イニシアティブ

大会で注目されたのは中堅国イニシアティブ（Ｍｉｄｄｌｅ Ｐｏｗｅｒ Ｉｎｉｔｉａｔｉｖｅ 略称ＭＰＩ）と新アジェンダ連合の動きである。ＭＰＩとは、「中堅国の市民と政府を動かし、核保有国に核廃絶の第一歩を踏み出させるための圧力をかけさせよう」というＮＧＯのキャンペーンである。ＩＣＢＬ（地雷廃絶国際キャンペーン）はカナダ政府などの中堅国に訴え、カナダ外相から協力を取り付け，終に地雷禁止条約が締結された。核廃絶でも同じようにやろうというのだ。

昨年、カナダで国際的な７グループ（ＩＰＰNW，ＩＰＢ，ＩＡＬＡＮＡなど）が集まりＭＰＩが始った。核は軍事ドクトリンの中心であり、核廃絶は地雷と同様にはいえない。しかし、ローチェ元カナダ軍縮大使は「地雷は大きな転換点であった。市民社会の力は大きく前進している」と語り、アクスワージ、カナダ外相（代理）は「カナダ政府が他の国と連帯し、ＮＧＯともいっしょに組織すると非常に効果がある」、「連帯して核廃絶を」と訴えた。

９８年６月、中堅国であるスエーデンとアイルランドを中心に新アジェンダ連合が核保有国の義務と今後のコミットメントについて宣言を発表。主要な中堅国がリーダーになって、「核保有国のリーダー達を説得し、核のない世界をつくろう」というものだ。前日（１２月４日）国連で、この宣言の決議「核兵器のない世界に向けて 新しい課題の必要」が採択された。オブライエン駐キャンベラ・アイルランド大使は「地雷禁止条約が成功したように、こうしたアジェンダが外の世界から形づくられる。我々は核兵器についても同じことをやりたい。成功しなければいけない。国際世論によって政府は変わる」と力強くのべた。また、アリスレータ氏は「ＮＡＴＯが反対から棄権に変った。その後、ドイツがＮＡＴＯの核先制使用に反対すると表明した。ＮＡＴＯの戦略も変えられる」と語った。
オーストラリアの世論調査（３週間前）によると、国民の９２％が「政府は化学兵器と同じように、核兵器廃絶のための条約づくりのために動くべき」と考えている。

先住民や植民地の問題も

今大会では先住民や植民地、地域紛争などの問題が取り扱われた。開催地の地域的な特徴でもあるが、こうした問題は大国の核戦略と密接に結び付いている。最も軍事化、核化がすすんでいるのは太平洋地域で、そこには様々な先住民・少数民族が生活を営んでいる。彼らは少数ゆえに人権が踏みにじられ、独自の文化が否定され、迫害され消滅させられようとしている。現在も、東チモールで、西パプアで、ブーゲンビリアで、土地を奪われ殺されている。

オーストラリアでも核実験がおこなわれたのはアボリジニの居住地で、「先住民の平均寿命が短い（５０歳）ため被曝による長期的影響の把握が困難」なほど医療事情も悪いと報告された。

南太平洋での核実験の被害は日本でもよく知られているが、「チョコレートをばらまき、やりたい放題」であるとのべられた。国の政策で先住民の主権、人権を侵害しないことが必要である。

トルコのクルド族は「クルド族の土地が奪われ、基地がつくられ、そこにＮＡ

ＴＯの核が配備された」、そのため「クルド人が虐殺されたがトルコは制裁されなかった」と訴え、イラクからは「８年にも及ぶ経済制裁のため、たくさんの女性や子供達が貧困と病気の犠牲になっている」と報告された。この異常なまでの制裁はアメリカが核独占政策に固執するからである。

その他、小火器のワークショップも設定され、先進国の武器商人達が大量の武器を売付け、小火器による大量殺人が世界中でおこっている実態について討議された。

”集い”の活動

折り鶴コーナー

恒例の広島・長崎アピール署名や折鶴の実演は場所が受付の前と良かったこともあり、なかなか盛況であった。同時に、さまざまな交流や意見交換もおこなわれた。被爆パネルの展示も関心が高く、たくさんの方が熱心に見入っていた。「医学生の教育用に、譲ってくれ」という申し入れもあった。沖縄米軍基地のＶＴＲも上映した。

河野氏が「米軍による環境汚染について」、和泉氏が「非核自治体宣言神戸方式をめぐる問題」、武居氏が「沖縄米軍基地の現状と撤去運動、日米新ガイドラインの危険性について」それぞれ発言、英文資料も配布した。

その他、パーティで、フロアーで各自がいろいろと交流を深めた。

つどいの参加者達

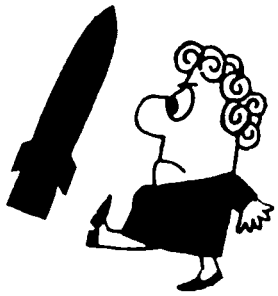
他のワークショップより

「非核兵器国の役割」で、ニュージーランドがいかにして非核法をつくったかなどの活動報告があった。「核兵器廃絶に向けて」では現在ある民生用のプルトニウムから約２万発の核兵器をつくることができるなどのプルトニウムに関する問題が討議された。その他、合計約５０の全体会議、フォーラム、ワークショップが設けられた。

国際キャンペーン

カナダ支部のアシュフォード女史から、「忍耐強いことも必要だが、積極的なアプローチが重要」と、“Ｗｅ Ｓａｉｄ Ｎｏ Ｎｕｋｅｓ”（「核はいらないといったでしょう」，過去形なのは２０年も前から言っているから）キャンペーンが紹介された。女史は「これをすべての場所で訴えたい。バンパーステッカーで、

テレビのコマーシャルの最後で、刺青で。マイケル ダグラスや有名人を使ってプロモーションビデオも作成している。世界中で“Ｗｅ Ｓａｉｄ Ｎｏ Ｎｕｋｅｓ！と言おう」とのべた。９２％のカナダ人がカナダ政府がＩＣＢＬと同様に核廃絶でも先頭にたつことを望んでいる。アメリカ人の８７％が核廃絶条約のための交渉を開始して欲しいと望んでいる。



We Said No Nukes！

スエーデン支部からは“Ｓｈａｐｅ Ｙｏｕｒ Ｆｕｔｕｒｅ”（未来をつくろう）キャンペーンが。これは、あなたの国で「核廃絶に導いてくれる一番信頼できる人は誰」、「核のない世界をつくってくれる音楽家は誰」などの問題をだし、生徒達がグループで討議し結果をインターネットで集約。そして、投票で選ばれた人と交渉、メッセージをもらったり、音楽をつくってもらおうという国際的な企画である。

学生の参加を

今大会ではあらかじめ、各支部から１名以上の学生参加をとの呼びかけがあり、学生や若手医師のワークショップも設けられた。”集い”からも長崎大医学生の長田氏を始め若手医師がたくさん参加、発言を含め積極的に活動した。今後の活躍が楽しみである。閉会セッションでは、「それぞれの支部で少なくとも学生一人を育て、発表の機会を与えよう」と提案があった。学生代表からは「ＩＰＰＮＷの将来は学生の手にある」、「我々は新しい思考方法を持っている」と頼もしい発言があった。さらに、ＩＰＰNWでは若き医師に１ヶ月程度の研修の機会を与えようと、そのためのプロジェクト案を募集することになった。

おわりに

核廃絶運動が確実に前進し、具体的にどうすれば核をなくせるか、そのステップを議論する段階まできている。さらに、インターネットの活用で、想像以上の速さで地球レベルの市民運動が力をつけ、その結果、政府の考え方までもが変化してきていることを実感した。

ＩＰＰＮＷがネットワークの中心的役割を果たしていくことの意義は大きい。しかし、一方では、全世界の支部が一堂に会し運動方針を討議する意義が少なくなってきている。インターネットが大会にとって変わるわけではないが、今後世界大会の持ち方には一考を要する。また外へのネットワークの広がりは重要であるが、内部のネットワークの充実にももっと目を向ける必要があろう。さらに、じかに交流を深めることも重要であろう。

最近、世界中で、反核運動に参加する人の数が減ってきている。核は「過去の話だ」という声がある。単に「もう、おこらないんだ」という意味だけだろうか？残念なことに、核兵器を使わずにヒロシマ・ナガサキをはるか陵駕する規模で大量殺人が繰り返された。第三世界では、毎日四万人が戦争や、それが原因の貧困

のために亡くなっているといわれている。広島級の原爆が三日に一度落とされている計算だ。人権は踏みにじられ続けている。「今、核よりも切羽詰った問題が目の前にある」と活動している人も多い。環境問題もそうだろう。人権を守る運動は多彩である。その人達と連帯して核廃絶の運動をすすめなければならない。そのために、我々はいろいろな運動から学ばなければならないと思う。ネットワークをはりめぐらせよう。

※ 今大会の報告集は印刷物としては発行されない。代わりにインターネット上で報告される予定（ｗｗｗ．ｈｅａｌｔｈｎｅｔ．ｏｒｇ／ＩＰＰＮＷ）。

同サイトにはＭＰＩなどへのリンクもあり、最新の資料が入手可能。